**太宰府天満宮の梅**

梅は、奈良時代（710-794）に中国から日本に伝わった。梅は朝廷の役人達によって大宰府にもたらされ、特に歌人でも学者でもあった菅原道真（845-903）公は梅の花を愛した。死後、道真公は太宰府天満宮に祀られ、梅の花は天満宮と大宰府のシンボルとなった。

9世紀当時、梅を栽培し、観梅会を催すことは高尚な文化的営みであり、道真公はそれに深く傾倒していた。大宰府への左遷のため京都を去る前に、彼は庭の梅に宛てた有名な歌を詠んだ：

東風吹かば

匂いおこせよ

梅の花

主無しとて

春な忘れそ

春の風が吹いたら

香りを届けてほしい

花開く私の梅よ

主人が居なくなったからといっても

春が来ることを忘れるな

伝承によれば、道真公が去った後、この梅の木は道真公がいないことに耐えられなくなってしまった。根こそぎ一夜で道真公のいる大宰府へと飛んでいったことで「飛梅」と呼ばれるようになったという。太宰府天満宮の本殿前にある大きな梅の木は、この梅の木だと言われている。6月の特別な式典では、神職や巫女がこの梅の実を集め、天神様のご加護をもたらす特別なお守りを数量限定で作る。

道真公と梅にまつわるもうひとつの逸話に、道真公が太宰府に到着した後、飢えに苦しんでいた時のものがある。その時、親切な老女が梅の枝に餅を刺して持ってきてくれた。今日、この老女の厚意は、梅ヶ枝餅という太宰府の名物に偲ばれている。餡が入った米粉の団子の表面に梅の花の形を焼き付けたものである。

太宰府天満宮の梅の木の多さは、天神様への敬愛の表れである。

境内には約200種6,000本の梅の木があり、1月下旬から3月上旬にかけて、庭や散歩道を紅白の花で彩る。

太宰府天満宮では、梅の枝を持って巫女が舞う「梅花祭」（ばいかさい）や、春の花の下で歌合が行われる「曲水の宴」（曲水の宴）など、梅にちなんだ祭りが数多く行われている。

現在、梅の花は太宰府天満宮のシンボルであるだけでなく、太宰府市や福岡県のシンボルでもある。太宰府市では、地域の家の庭先に梅の木が植えられており、街の文化の固有な部分となっている。